



第4図 勝寶城跡測量図

また良く締まることを示している。

空堀東端には東西5m、南北5mのコの字形の石組みがある。東側の通路との比高差は1.8m程である。この石組み部分は、本来空堀として本丸防備に重きをなす地点に築かれていること、眼下に居館佐料城跡や香西の町を、またはるかに高松平野の隅々まで見渡せることから物見櫓等の基礎部であろう。ただ、残念ながら、調査によつては、建造物跡と思しき遺構は検出されなかつた。

(土塁)

堀切と郭との間を両する低い土塁は、事前のボーリング棒による調査で、周辺部を石で固めている感触を得た。しかし表土層を剥いてみると、土塁は小石を含む上で構築され、石組みは土塁先端部を防護するように存在しているのみであった。

(本丸土塁)

本丸土塁は崩壊部分に限り、縦2m、横8mにわたって断面L字形にカットした。深さは17m前後である。

土層は、崩壊部分で左右が大きく食い違っている。この部分を細かく観察すると、東側部分は径3～5cm大の明黄褐色の礫を多く含み、そのためもあってか、特に下層では黒色粘質土層がレンズ状に見られ、版築工法によって築かれていることが観察される。西側部分は、礫を殆ど含まず、また版築されている様子が明瞭に観察できない。

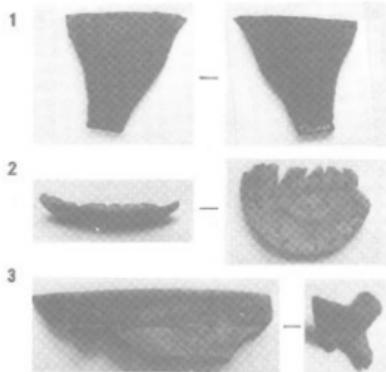
他に注目されることは、土塁裾部にあたる所で飛び石状に検出された人頭大の石である。

(4) 遺物について

二の丸跡で今回得た遺物は、備前焼、土師質土器、瓦片、巻貝である。備前焼(第6図1)は堀脇部の破片ばかり3点、土師質土器は小皿(第6図2)、甌(第6図3)鉢等である。瓦片は、コ字形石組み部上面



第5図 本丸 畿 発掘部分



第6図 第二次調査出土遺物

白山 3 遺跡

所 在 地 木田郡三木町下高岡

調査期間 昭和54年7月12日～同54年8月1日

調査担当 斎藤賢一・伊沢肇一

(1) 調査の経過

今回の調査は昭和53年秋から冬にかけて行なわれた土地造成に伴い、箱式石棺一基が壊されているとの連絡が、昭和54年6月に三木町教育委員会にあった。三木町教育委員会では、早速県教育委員会と協力ををおこない、関係者の了解を得て緊急発掘調査をおこなうこととした。調査は、三木町教育委員会が主体となり、県教育委員会の指導のもとに同年7月12日より残存部の調査及び周辺部のトレンチ調査を開始した。それによって、さらに石組み二基と住居跡が検出され、あわせて調査をおこなった。

(2) 遺跡の概要

白山は、志度湾に望む小山塊群の南端に位置し、標高 203m を測る。南麓近くには古川・新川の両河川が流れ、肥沃な平野が広がっている。

白山遺跡は、白山の南麓にあり、南西に派出した2本の尾根が形成するU字状地形に立地する。標高は、ほぼ54～57mを測る。

遺跡周辺には銅鐸出土地の白山1遺跡や、弥生上器の散布地である白山2遺跡のほか、縁が丘古墳・鳥打古墳など弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数確認されている。

(3) 遺構について

当初の調査計画では、露出している石組み1基が調査の対象であったが、調査により石組み2基・住居跡1が検出された。石組みはほぼ南に向いた斜面の標高 55m～57m を測る等高線上にあり、比高差 25m を測る、各石組みの中から遺物は出土しなかった。整地工事による攪乱は



第1図 遺跡位置図

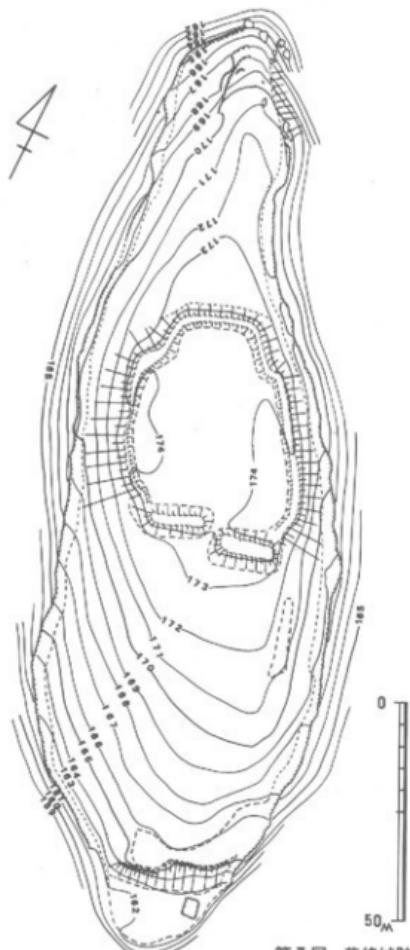
1. 白山 3 遺跡
2. 白山 1 遺跡
3. 天神山古墳群
4. 白山 2 遺跡
5. 理地藪南丘古墳
6. 鳥打古墳
7. 鳥打大西谷 1・2 号古墳
8. 駒足古墳群
9. 長谷丘上古墳
10. 小倉東丘古墳
11. 縁が丘古墳
12. 隠浦 1・2 号古墳

で検出した。細片なので、瓦片と断定はできないが、本城跡と同時期に存在した天霧城や雨滴城からも瓦片が出土しており、今後の調査が期待される。

(5) おわりに

第2次調査では、この外に遺存状態が良好な黄峰城跡の測量調査を実施した。

詳細は近日刊行予定の報告書を参照されたい。



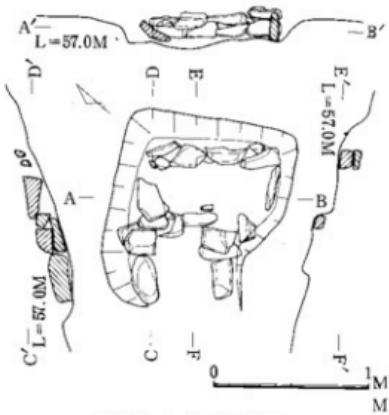
遺構面に及んでいるところもあり、遺存状態は不良であった。石組みに用いられている石材は全て白山に産する安山岩系のものである。

a 白山1号 調査の契機となった石組みで、等高線に平行に築かれた石組み外径の長辺は約1.2mを測り、等高線に直交する短辺は約0.8mを測る。ほぼ長方形の石室が形成されており、内径は1.0m×0.4mを測る。工事によりかなりの部分が削り取られたと思われるが、山側の面が比較的残存度が良好で、2段に積み上げられた側壁は、ともに偏平な石を使用し、1段目を横長に立てて、その上に2段目を平らに置いている。短辺側は一枚石を立てて側壁としている。谷側は地山に接する最下段が残存するのみであるが、しっかりとしており、原位置を保っていると思われる。また、この谷側の石に接して置かれた2つの石は、地山上にしっかりと固定されており、石組み構築時から置かれたものと思われる。この2つの石を石組み補強のために置かれたと考えれば、礎岐によく見られる箱式石棺の1種とみなされる。一方、この石を重視すれば、古墳時代終末期に形態のみ横穴式石室を模倣して小型化したもので、谷側の2石は羨道部分と考えられる。

b 白山2号 白山1号の北西10mに位置する。石材は1号と同じ安山岩を用いている。配列に規則性が見られない。石組み内部から遺物は出土しなかったが、中心部には炭化物を多く含む黒褐色土が検出された点が注目される。1号に用いられている石に較べ、全体として丸みを帯びたものが用いられている。

c 白山3号 白山1号の南東12mに位置し、等高線にはほぼ平行に長辺3.8m、短辺0.5mを測る掘り方が検出されたが、谷側部分に於てかなり削り取られたと見られる。掘り方からは、1・2号よりも規模の大きかったろうことが推定されるが、石組みがほとんど残っておらず、構造・規模は不明である。

d 住居跡 U字形状の北側尾根上に立地し、標高55mを測る。住居跡南側半分が調査区内で検出された。北側半分は調査対象地区外に展開するものと思われる。また、南西端は削り取られているため、結果的には全体の $\frac{1}{2}$ が検出されることになる。このため、全体の様相を把握することは困難であるが、検出された遺構の観察から径6mの円形住居を想定することができる。住居跡内には4つのピットを検出した。中央には漏斗状を呈すピット、東端には $20\times20\text{cm}$ の礎が底に検出されたピット、径30cm、深さ30cmの筒状ピットなどそれぞれのピットが特徴をもっており、柱穴



第2図 白山1号実測図

としての配列は認められなかった。

(4) 遺物の出土状況

土器片を多く含んだ包含層は、住居跡のある尾根の南東斜面を中心に谷筋にまで広がりをもっている。しかし、その中から出土した土器片は多くが磨耗した細片で、復元・実測できないものが大半である。一方、石器はおもに住居跡より出土したが、中央部分では多数のチップ・剝片を伴っており、石器製作がおこなわれた可能性を示している。

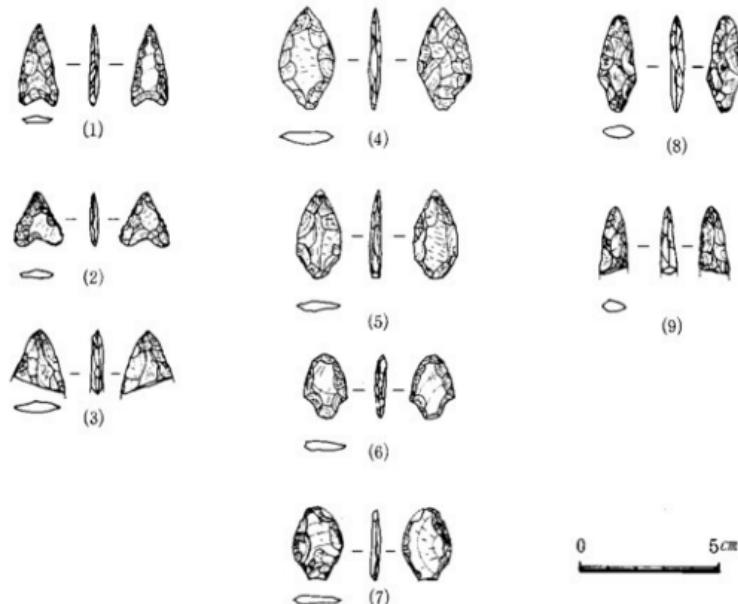
(5) 主たる遺物

a 石鏃 出上した石鏃は全てサヌカイト製である。住居跡から8点、表面採取1点の計9点を数える。全て剝片を利用したものである。

分類は主に形態により、2大別5類とした。最初に、大別として(1)凹基、(2)凸基に分けた。(1)凹基はさらに、二等辺三角形を呈するものを(1)-Aとし、正三角形を呈するものを(1)-Bとした。

(1)-A類は図の(1)に当る。えぐりは深く、細かい調整が縁辺部に加えられている。中央部には剝片段階の面を残している。

(1)-B類は図の(2)に当る。表面採取によるものである。調整は細かく、中央部に剝片段階の



第3図 石鏃 実測図 (1/2)

面を残す。他のものに較べて風化が進んでいる。

(I) 凸基はA・B・Cの3つに分類した。
(II)-A類は図の(4)・(5)に当る。比較的大型で先端部が尖っている。調整は側縁部におこなわれているが粗い。階段状剥離を呈する調整痕も見られる。中央部に剥片段階の面を残す。(5)は先端部を欠損している。

(II)-B類は図の(6)・(7)に当る。(II)-A類に較べ鎌身が短く、先端部が丸みを帯びている。中央部には剥片段階の面を残す。(6)は側縁部に粗い調整が加えられているのみであるが、(7)はその後細かい調整が追加されている。

(II)-C類は、鎌身の長さに較べ幅が狭く、断面レンズ状を呈す。側縁部の一次調整は粗く、中央部分にまで及び剥片段階の面を残さない。一次調整の後、細かい二次調整が加えられている。図の(8)がこれに当る。

(3)と(9)はともに基部を欠損しているため分類し難いが、調整や形態からみて、(3)は(I)-A類、(9)は(I)-C類に分類できるのではないだろうか。以上の分類によれば圧倒的に(I)凸基式が多く、7:2の比率である。

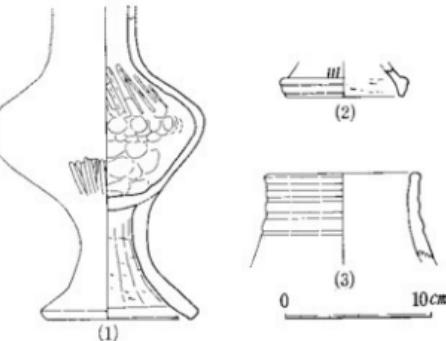
b 石庖丁 石材にはサヌカイトが用いられている。すべて破片で完形品は出土していない。調整は粗雑である。また、概して小型品で5点を数える。

c 調整痕ある剝片 不定形の剝片に片面のみから調整を加えたもの、石鎌製作途上を思わせるものなどがある。製品の2倍を数える。

d 土器 出土した土器のうち完形品は1点もない。完形に近いものとして第4図(1)の脚台付壺があげられる。但し、遺構に伴うものではなく、包含層から出土したものである。多少歪をもっており、比較的粗雑なつくりである。焼成は普通だが表面はかなり剥離がはげしく、僅かに体部下間にヘラ磨きのあとを見ることがある。内面には頸部と脚部に絞り込みの跡が見られるほか、体部下半には指頭圧痕、体部上半にヘラ削りが観察できる。口縁端部を欠損しているため器高は不明である。

同じく包含層から出土したものに(2)がある。下端部に2条の凹線をもつ高壺の脚である。(3)は筒状の口頸部がほぼ直立するもので、頸部外間に凹線が見られる。

出土した土器片の多くが細片で、しかも磨耗が著しいため図化できたのは以上の3点にとどまった。小片の観察



第4図 土器実測図 (1/4)

によると、埴土には比較的多くの砂粒が含まれており、高杯・壺型土器が多数を占めるようである。

(6) まとめ

検出された8基の石組みは、ともに遺存状態が悪く遺物も出土しなかったため、時代を推定することは困難であった。

住居跡については、その内側に検出された包含層出土の土器第4図(2)の様相から、弥生時代中期後半に推定できる。ところが石跡について見ると、凸基式の比率が大で、弥生中期後半の遺跡としてあげられる西讃の詫間町紫雲出遺跡⁽¹⁾坂出市長者原遺跡⁽²⁾に見られる、平基・凹基 > 凸基の比率と食い違いを見せる。この違いが、西讃と東讃という地域の違いによるものか⁽³⁾、或いは当遺跡が弥生中期後半でなく、凸基式の比率が多くなる弥生後期に位置づけられるのか。この点についても出土点数に問題があり、即断できないと考える。

以上述べたように、白山3遺跡においては資料が少ないため、住居跡と石組みとの関連性や、周辺遺跡との関連性についても不明な点が多く、今後さらに調査が望まれる。(齊藤)

註(1) 「紫雲出」
1964年 詫間町文化財保護委員会

註(2) 「香川県埋蔵文化財調査年報」
昭和58年度 香川県教育委員会

c「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(1)与島西方」
1979年3月
香川県教育委員会

註(3) 前掲「紫雲出」
白山1号(西より)



住居跡(西より)

陰浦第1・2号墳

所 在 地 大川郡長尾町昭和字山田乙 842番地1

調査期間 昭和54年6月4日～同年7月6日

調査担当者 六車 功・沢井静芳・伊沢肇一・齊藤賢一

(1) 調査の経過

陰浦1号墳・陰浦2号墳は、大川郡長尾町昭和字山田地区に所在する横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。

昭和51年12月、同所の地権者である古市春雄氏が尾根東斜面を畑に開墾中、幅0.60m、長さ240mの石組みを発見し、長尾町教育委員会へ連絡した。町教委担当者らが付近を調べたところ、この石組みの中から須恵器の長頸壺(1)が出土したので、この石組みを古墳の埋葬施設と判断して、陰浦古墳と名められた。

昭和54年6月、同所は、畑として開墾されることとなり、町教委は地権者の了解を得て県教委の指導のもと緊急発掘調査を実施することになった。

しかし、6月18日に調査進行中の本墳の奥壁からわずか北東4mの地点で須恵器の壺、高壺、平瓶等を伴う横穴式石室を新たに確認した。

ここで從来から陰浦古墳と呼んでいた本墳を陰浦1号墳と呼び、新しく確認した古墳には陰浦2号墳と命名した。

発掘調査は、2号墳についても実施したが、協議の結果遺物多数を出土した2号墳の現状保存が決定した。

(2) 遺跡の環境と立地



周辺の遺跡位置図

図中番号	遺跡名	図中番号	遺跡名
1	陰浦1号墳	8	鳥打古墳
2	陰浦2号墳	9	鳥打大西谷1号墳
3	縁ヶ丘古墳群	10	鳥打大西谷2号墳
4	小倉東丘頂古墳	11	白山銅鐸出土地
5	駒足古墳群	12	白山遺物散布地
6	鷺足古墳群	13	白山神丘西埴輪式石棺1号
7	鷺地藏南丘古墳	14	白山古墳群

本墳は、明治5年に架設
樽文銅鐸が出土したことや、
弥生時代の遺物散布地とし
て知られる白山(2080m)
の北北東1.4kmの尾根東斜
面(650m)に立地してい
る。

ここは、周囲を山に囲ま
れているので見通しが悪く、
ほとんど人家をみるとこ
は出来ない。冬は割合いに暖
いが、夏はかなり高温多湿
の地である。

このうち1号墳は主軸を
等高線に対して平行に、2
号墳は等高線に対して直交
するように造営されている。
1号墳の奥壁から北方約40
mに2号墳の玄室の左側壁
の基底石がある。1号墳と
2号墳の床面の差は約90cm
で後者が高い位置にある。

周辺には、標高50mから
100m前後のなだらかな丘
陵がひろがっていて、多く
は山林か果樹園として利用

されている。丘陵と丘陵の間の低地は、階段状の水田として開かれ、谷頭池を利用して耕作さ
れている。

本墳の所在する、これらの丘陵地には、今のところ町内の南部にある福荷山古墳や中代古墳の
ような古墳時代前期に比定される遺跡や遺物は発見されていない。

しかし、本墳の東250mには、昭和51年夏発掘調査が実施された緑ヶ丘古墳群をはじめ長谷
丘上古墳・鳥打古墳・白山古墳群など、とりわけ、須恵器と横穴式石室に代表される古墳時代
後期以降の墳墓が集中するところとして知られている。

(3) 遺構について



遺跡の遠景 中央の矢印が陰浦古墳群・左方の丸い山は白山(2080m)



調査風景 調査がほぼ終了した陰浦1号墳・左手前方は陰浦2号墳

1) 陰浦 1号墳

本墳の埋葬施設は主軸をN-30°Eにとり、ほぼ南南西に開口する単室の無袖式横穴式石室である。

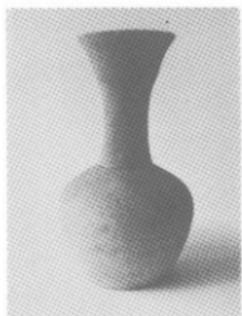
石室の規模は、奥壁幅 0.6 m, 玄室中央幅 0.75 m, 玄門幅 0.60 m, 羨門幅 0.9 m, 玄室長 1.9 mを測りバチ形を呈する。

石室が小型の為か墳丘形成の為の盛土には複雑さはない。墳丘は推定で、高さ 1.5 m ~ 2.0 m, 径 5.0 ~ 6.0 m 前後で石室をおおう程度であったと思われる。

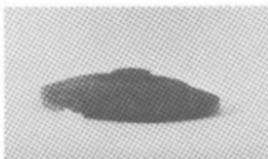
本墳に伴う遺物は盗掘の為かほとんどなく須恵器（長頸壺①, 坯蓋②, ③, 細片少々）と土師器（細片少々）が弱く検出されただけである。

本墳の筑造年代や使用期間は、はっきりしないが、遺物から判断すれば7世紀中葉～7世紀あたりが考えられよう。（六車）

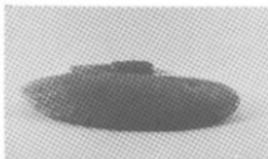
①



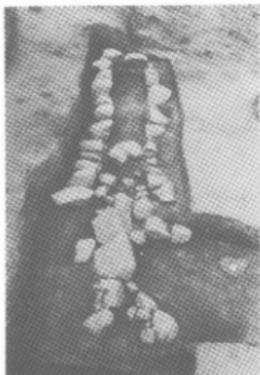
②



③



④



① 須恵器長頸壺

② 須恵器坏蓋

③ 須恵器坏蓋

④

姿を現した陰浦 1号墳

陰浦 1号墳と出土遺物

2) 陰浦 2号墳

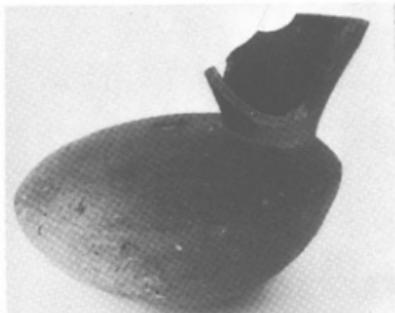
本墳の埋葬施設は、傾斜面の地山層を等高線に直交する形で掘り込んでいる。主軸はN-36°-Wにとり略南東方向に開口する片袖型横穴式石室である。

玄門部より前方が欠損しているため全容は不明であるが、奥壁の高さ110cm、幅80cm 羨道部に近い部分の幅60cm、玄室の全長300cm、奥壁の部分が広く、玄室前方部のやや窄った細長い台形状プランを呈している。

石室の石材は、花崗岩の自然転石と割石を利用して構築している。奥壁と側壁の基底石はやや大型の石材を配している。そしてその上に2~3段の石積をして上面の高さを揃えている。奥壁と側壁のコーナ部分はやはり、持ち送り的手法が用いられている。

出土遺物は、床面上15cm~20cmのレベルから出土するものと、床面直上から出土するものに区分できる。前者は、奥壁近くで平瓶1を検出する以外は玄門部に須恵器が集中している。

後者の床面直上よりの出土は、玄室のはば中央部、黒色有機質腐蝕土中より金環大1、小1の検出をみた。いずれも断面が梢円形の棒銅を環状に曲げ、両端をやや絞った中実銅地金張り製である。金の剥脱が若干あるが保存状況は良好である。また鉄器類では、玄門部近くの右側壁部から刀子一点を検出した。土器類では須恵器の出土をみると多くは、焼成不良で、彎曲した歪なものである。(伊沢)



①



②



③



④



⑤

主な出土遺物
① 平瓶
② 杯蓋
③ 杯身
④ 平瓶
⑤ 刀子
⑥ 金環



⑥

(4) まとめ

本墳についての詳しい発掘調査報告は、長尾町文化財保護協会発行の「ふるさと長尾」に掲載しています。



陰浦 2号墳の石室と遺物出土状況

昼寝城跡 (第二次調査)

所在地 大川郡長尾町前山昼寝

調査期間 昭和55年1月28日～同年2月29日

調査担当 伊沢肇一・寒川知治

(1) 調査の経過

昼寝城は、かねてより東讃の代表的中世山城として、雨庵城、虎丸城と共に注目されていた。

「南海通記」「南海治乱記」「讃岐古城記」「弘化録」「全讃史」など多くの文献に昼寝城の名前をみることができる。しかし昼寝城の構造や櫓張りは確認されていない。まさに「幻の城」である。

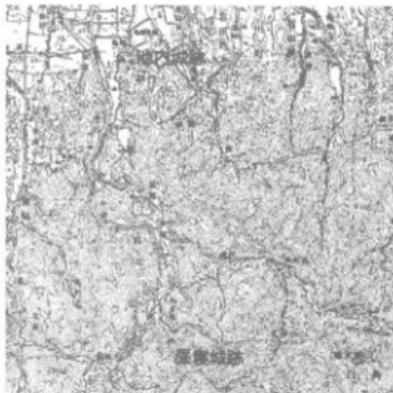
そこで長尾町教育委員会は香川県教育委員の協力を得て、53年度と54年度の2ヶ年計画で昼寝城跡の調査を実施した。53年度は、昼寝山頂から北西に派生する丘陵尾根上の平坦地に所在する居館跡推定地の地形測量を行った。今年度は、昼寝山頂部周辺の地形測量と発掘調査を実施した。また、関連城跡として、寒川氏の里城と伝えられている地の内城跡(台が城跡)の地形測量も併せ行った。

調査は1月28日より開始した。途中積雪に悩まされたが2月29日に埋め戻しをして調査を終了した。

(2) 位置と環境

昼寝城跡は長尾町前山昼寝山頂に所在する。昼寝の里は、阿讚山脈を形成する山塊と前山川の地溝帶内に形成され山間部特有の階段状地形(段々畑)が連なっている。昼寝山の裾を谷川と太郎部衛川が合流し、東から北西方向に蛇行しながら流れ、多和神社の所で前山川に流れ込み一大人造湖前山ダムへと注いでいる。

前山の渓谷は深く、V字谷の様相を呈しているが、所々で前山川に大きく張り出し、わずかな平坦地を形成している。渓谷の左右には、女体山(768m)、矢筈山(787m)、ウサギ山(389m)の他400m級の山が連なり尾根が幾重にも派生しいっそう渓谷を深く、きびしい



第1図 城跡の位置図

ものにしている。そして、谷あいを縫うようにして県道志度～脇町線が走っている。

(3) 城跡の概要

昼寝城跡の所在する昼寝山頂は、平坦地が2ヶ所ある。西平坦地は約100m²あり、その西隅に「寒川社」と呼ばれている祠が鎮座している。一方東平坦地は約280m²あり、西平坦地より約1m程レベルが高くなっている。そして、平坦地を取り巻くように平坦地の南崖線上を西から東へと土塁を築いている。土塁と平坦地との最大比高差は約0.8mを測る。また、山頂部の鞍部に幅2.5m～3.0m、長さ約25mの通路があり「馬場」と称し、東西の平坦地を結んでいる。

山頂平坦地の周囲は、急峻な地形様相を呈しており池の内城を眼下に、遠く播磨灘を望み眺望がひらけている。

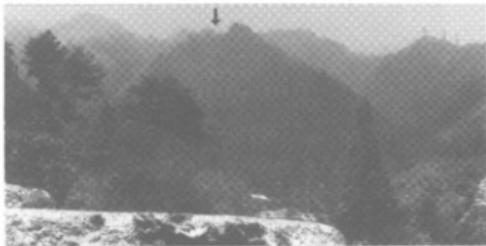
東平坦地の南西端より尾根筋に下山道があり、比高差にして10m下った箇所に掘切りの様相をしている窪みがある。上端で幅約5m下端で約2m、両壁が傾斜しており諸薬研塙の地形をしている。そして、中央に土橋を構築している。

堀切りのすぐ南西尾根筋に幅約3.0m、長さ約18mの平坦地があり、そこから、さらに下ると鞍部となっており、その下は急崖状の渓谷をなして谷川が流れている。

(4) 遺構・遺物について

調査にあたって、東平坦部に現存する土塁の高まりを確認するため東西10m×3.5m、5m×2m、南北4m×1.5m、4m×2m、2.5m×3mのトレンチを設定し都合約75m²の試掘をした。

その結果、土塁の北側平坦部の土層は表土層より30cm～40cm掘ると地山であり花崗岩の風化礫を多く含有している。そして平坦部のほぼ中央部地山直上から略東西に一直線上に並んだ礫石6ヶが検出された。礫石の柱間幅1.9mを測る。そのうち4ヶは上面がフラットで、径30cm～35cmを計測するしっかりしたものである。ただ残りの2ヶは径20cm程度の小ぶりで上面がやや尖っており、柱間幅も若



第2図 (上) 昼寝城跡遠景
(下) 昼寝城跡より池内城跡を望む

干異っている。

礎石に使用されている石材は、昼夜山周辺に多く産する花崗岩の自然石を用いているが割合偏平なものを選択採用している。しかし、略東西に一列の礎石が検出されたのみである。北側にもう一列の並びをもった礎石を期待したが確認されなかった。掘立柱穴の跡も確認できなかつた。

一方土壘については櫛(馬跡)と敷との最大比高差約1.2m、現在長ほぼ28mを測り、平坦部南端の崖線上に構築されているが、若干崩壊している。すなわち土壘は、「カギ」状に平坦地の南と東を囲むように構築されている。

その土壘の外側(外法)すなわち南側の一部と、内側(内法)の一部に石組が検出された。外側の石組は2列になっているのが検出された。そのうち外側の石列は、花崗岩自然転石の乱石積(野面積)をしており大きいもので径60cm、小さいもので径20cmの石材で2~3段構築している。かなり崩壊しているが、土壘の主軸線と平行して約8m現存している。また、さらに80cm内側にも石組が検出された。しかし、径約60cmの正方形に近い石は、人為的に構築したものではなく、自然の岩盤を利用したものと考えられる。その岩石の東西に存する石組は構築したものであろう。この2列の石組は、土壘構築時に、土壘の側石積として補強の役割をもたせたものである。



第3図 発掘調査風景

一方、土壘の内側すなわち北側には、東西にほぼ8.5mの石組が確認された。石材は、花崗岩自然石のこぶりなものが多く、5～6段の乱積となっている。現存する石組の東で1.4m欠損している。これは、後世に上端径約2mの擂鉢状穴を掘っており、その時に石を除去したためである。そして石組は、土壘がカーブする点より北に向けて、階段状に3段並んでおり、石組の北側一面の地山直上に不整形形状の石組がひろがっている。

ついで土壘の構築についてみると、山頂部の旧地形は、南が高く、北ほど次第にレベルが下がっている。土壘と平坦面の境に石組を築き、平坦面の地山を削り水平に調整している。削平した土は、土壘の地山上に積み上げて土壘をより高く構築している。

出土した遺物は、土師質土器片、古銭、青磁片、白磁片、砥石片などが出土している。

土師質土器はすべて破片で全体の形状に復元できるものはない。多くは底部に回転糸切りの痕跡をみることができる。青磁片、白磁片も破片ばかりで復元可能なものはない。砥石は1点出土したが約50%欠損の破片である。若干砂粒が混入している中砥石である。

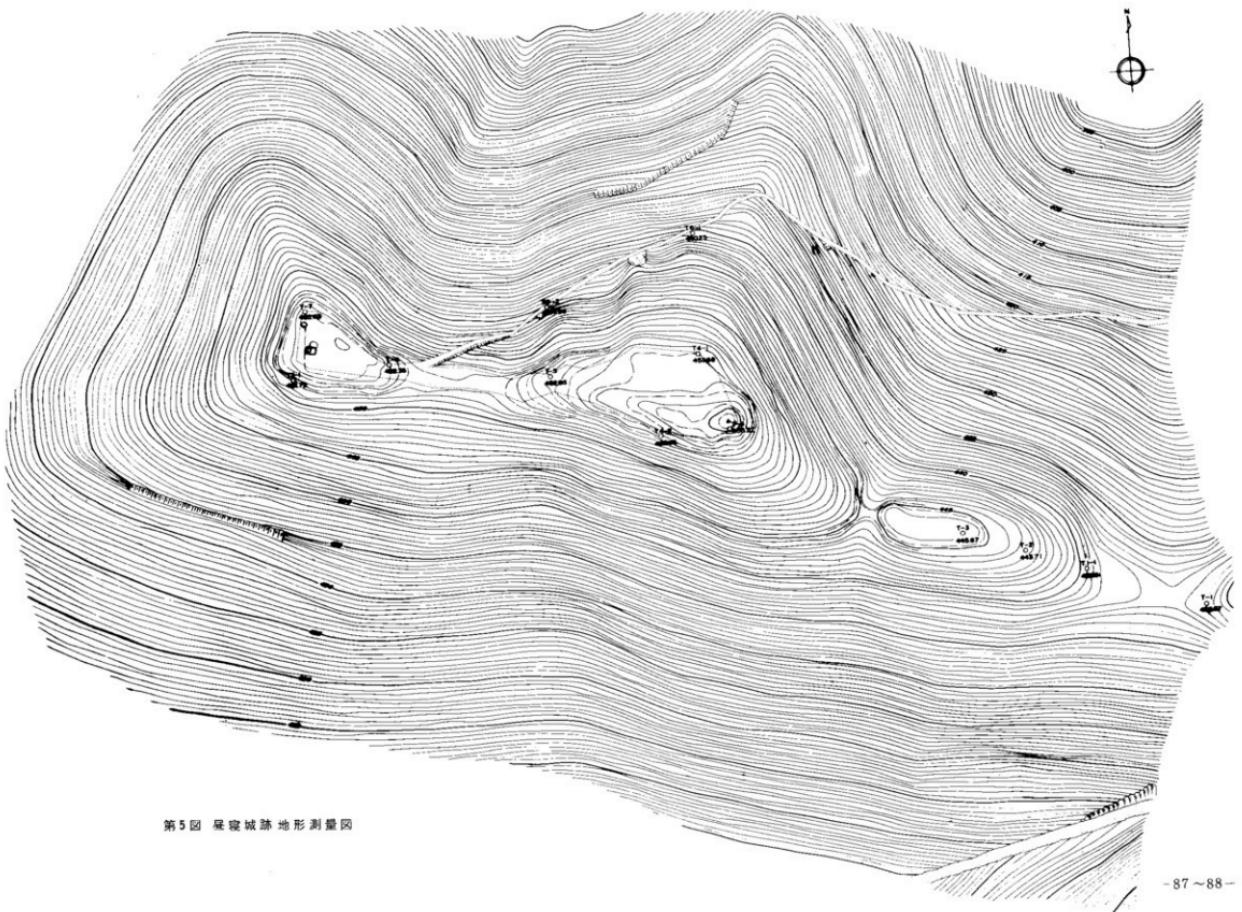
古銭は9枚出土している。洪武通宝（初鑄年1868）2枚と不明6枚である。（うち2枚80～50%欠損）。

(5) おわりに

今回の調査は昼寝城跡があったと伝えられている昼寝山頂部の発掘調査と踏査をしたが、山頂部に生活の跡が存在していたことは確認できたが、昼寝城の網張りを云々するまでには至っていない。前山地区に、城に関連した字名として「堂面」「ショウノミギ」「掘切り」などがあるが、昼寝城との関連についても不明である。また昼寝城主、寒川氏の系譜についても「南海通記」「南海治乱記」「弘化録」「西畿府志」などの文献や、地元居住者の持つ寒川氏の系図などからしても不明な点が多い。寒川氏の系譜については紙面の都合で省略した。近く長尾町教育委員会より、昼寝城跡調査報告書を刊行する予定である。（伊沢）



第4図 西より昼寝山頂東平坦部を見る



第5図 墓塚城跡 地形測量図

第6図

一直線上に
並ぶ礫石



石垣と石組



土堀と腰巻石垣



文化行政課埋蔵文化財調査担当者名簿

課長	笹川高美		
課長補佐	前田治衛		
副主任幹	松本豊胤		
文化財専門員	伊沢肇一	主査(庶務)	下河芳樹
主任技師	车礼良典	主事(〃)	山口博久
"	斎藤賢一	"(〃)	中西光邦
"	竹下和男	"(〃)	遠山美也子
技師	沢井静芳	臨時職員	川田洋子
"	六車功	"	稚山貴
"	渡部明夫	"	川崎久美子
"	寒川知治		
"	廣瀬常雄		
"	大山真充		
"	藤好史郎		
"	真鍋昌宏		

埋蔵文化財発掘調査坂出連絡事務所

所長(嘱託)	増田正伯
(嘱託)	大砂古直生
(〃)	白本清
(〃)	西村尋文
(〃)	町川義晃
(〃)	中西昇
(〃)	西山佳代子
(〃)	玉城一枝

香川県埋蔵文化財調査年報
昭和 54 年度

昭和 55 年 8 月 31 日

編集発行 香川県教育委員会
高松市番町四丁目一番十号
(0878) 31-1111 (代)

印刷 オール印刷株式会社
高松市中央町 18 番 4 号